全学連書記局通達

No.08
東京都千代田区駿河台1-1 明大内 全学連書記局

九・二二～二三全国基地闘争激発！

立川基地突入はじめ敵の心臓部に迫る！

全学連拡中委（九・三〇～一〇・二）を起点に

十八羽田一周年―十・三全国ゼネストを安保粉砕―自帝打倒へ貫け！

全国の同じ学友諸君。

七月全学連大会で決定された「七〇年安保粉砕に向けて、諸基地―沖縄闘争の激化、全国主要都市における実力闘争の徹底的展開」の方針は、九月闘争就中九・二二―二三における全国を席巻した全学連のデモンストレーションによってその力強い第一歩が築かれた。

九・二二―二三闘争はその規模と鋭さ、日和見主義諸派との峻別という一切の点において最もつき進んだ地点をきり開いた。

九・二二立川基地突入を最先端にした全国の基地撤去―米タン輸送阻止、弾薬庫撤去闘争は、文字通り全国をなめつくすように拡大、激化し、安保闘争の先陣としての役割を充分に示したのである。

われわれは、この九月闘争を成果に、来るべき大十月闘争の展望をつかみとらねばならない。

最初に、全学連の闘いの概要を見ておこう。

まず全国基地闘争の焦点として闘われた立川現地闘争はどうか。

一言でいって、今回の闘争の特徴は、昨年の砂川闘争（＝拡張阻止）の質を一段と高め、「基地撤去」闘争そのものとして闘われたことである。

九・二二闘争は、日本人民、学生人民によって基地がいちだるしい危機に立っていることが公然と暴露された。人民への殺戮と侵略の拠点は同時に人民からの怒りと反撃の対象でもある。そして侵略基地に全学連の断固たる反撃の刃がつきささったのである。

全学連の六〇〇名の部隊は米タン輸送路＝新宿駅で怒りと抗議の第一声を発したのち、立川に向った。武装した全学連の部隊は、立川駅に着くやいなや、駅前を埋めつくした反戦労働者一千と数千の民衆の歓声を受けたのち、一挙に立川基地そのものに向って突進した。

立川基地は、立川市のド真中に存在し、密集した民家をおしのけて横たわる広大な土地であるが、それも駅から数分のところにある。これがいかに危険であるかはいうまでもないが、これが立川市民への抑圧物であるばかりでなく、ベトナム人民に向けられた殺人基地である。

全学連が正々堂々と立川基地に向って突進したことは、その撤去を実力でかちとるため当然のことである。基地の機能を麻痺させ、ベトナム侵略を不可能にせしめたばかりでなく、基地の存在そのものを許し難いものとして粉砕せんとする人民の闘いの最も具体的なあり方に代らなかった。

安保条約―その実体としての軍事的機能＝基地を危機におとしいれることは、事実上安保条約を無効ならしめ、粉砕していく最も重要な闘いである。

全学連の本隊は一挙に基地に到着するやその金網をのりこえ、「中核」の赤旗が基地内を走る。目の前に武器、弾薬、兵器を満載したジェット機が数機ならぶ。走るデモ隊に警棒でおそいかかる基地内に待機していた機動隊と私服刑事。基地の中は走るデモ隊と警官の大乱闘が繰りひろげられ、白煙、爆音と爆風で人民の上からのしかかるジェット爆風機も今日は完全なる受け身で向一つ出来ない。まるでベトナム人民の反撃に出会ったときのように、青ざめた顔をして立ちすくむ米兵。

立川基地は、全学連の攻撃でふるえ上った。侵略基地が、いかに軍事的に強くとも、四方八方から攻め込む人民の反撃には全く無力である。人民への抑圧者は、その抑圧に苦悩もする反抗を受けなければならない。